

中国吉林省長春市での日本語教師体験

日本学生支援機構東京日本語教育センター教員 平山 允子

HIRAYAMA Yoshiko

1. 初めての長春赴任 — 2004年夏～2006年夏

1-1. 赴任までの経緯

中学生のときに通い始めた英会話教室のアメリカ人講師の先生に憧れて、「母語を教える仕事に就きたい」と考えるようになりました。

修士課程2年の春に、在籍していた日本語教育学の研究室に「中国吉林省長春市の大学で日本語を教える教師を公募する」というお知らせが来ました。数年前に同研究室で修士課程を修了し、長春市内の別の大学で日本語教師をしていた先輩からの情報でした。その公募に、私はすぐに手を挙げました。

日本語教師になることが中学生の頃からの夢でしたし、学部時代から続けていた日本語学校でのアルバイトも楽しく、修士課程修了後の進路として日本語教師を選ぶことには当時すでに迷いはありませんでした。また、実際に社会に出て就職する前に、大学院を休学して海外で日本語教師の経験が積めるということに、大変魅力を感じました。両親と恋人の説得も意外とすんなり済み、必要書類を揃えて早速応募しました。

数週間後に先方の大学から採用の連絡を受け、その年の8月から長春へ赴任することが決まりました。

1-2. 現地での仕事と生活

赴任先は、外国語学部の中に日本語の専攻ができて間もない大学でした。私の着任時は、2年生が15人×1クラス、1年生が25人×2クラスという程度の小規模な現場でした。しかし、翌年には約25人×5クラスの新入生が入学し、正に倍々の規模拡大が進められているところでした。どのクラスも私が日本でアルバイトをしていた日本語学校と比べて学生数が多く、クラス運営には様々な試行錯誤が必要でした。

また、日本人教師は私1人という環境でのスタートでした。しかし、学生たち、中国人の先生方、同じ宿舎に住む外国人の先生方などと学校の内外で楽しい時間を共有でき、孤独感はありませんでした。また、月に1度、長春市内の日本語教師が集まる日本語教師勉強会¹に参加することで、他の教育機関の先生方と知り合うこともできました。さらに、2年の赴任期間の最後の半年には新しく日本人教師の採用があり、校内に日本人教師が2名となって、ますます楽しい日々になりました。

私の赴任先では、ほとんどの学生たちが大変意欲的に日本語を学んでいました。教師の私が教室全体に向かって投げた質問にはいつもすぐにたくさんの声が返ってきましたし、学生同士の意見交換や話し合いも大変活発で、教室の中はいつも賑やかでした。学生たちのこの元気さ、そして集団のパワーのようなものが、私には非常に魅力

¹ 参考URL <http://blog.goo.ne.jp/changchun-teachers>

的に映り、「明日の授業では、こんな仕掛けで学生たちの日本語を引き出そう」と考えることが、毎日楽しみでした。

私が担当したのは、日本語の授業のうち主に「会話」と「作文」でした。他校でも、この2つは日本人教師が担当することが多いようでした。どちらも産出系の科目のため、言いたいことがたくさんある学生が多い私のクラスでは、教師はタスクなどの仕掛けを事前に準備しておけば、授業当日は学生たちが主体的にどんどん授業活動を進めていってくれるような状況でした。

ただ、それでも話し足りないと感じる学生も多く、授業の他に週1～2回、「日本語コーナー」というものも開くことになりました。これは、放課後18:00～20:00の時間に教室を開放して、そこに日本語を話したい人が集まるというものでした。初めは完全な自由会話とし、私も学生の輪に入って着席し、発話の訂正や会話の軌道修正などを適宜行いました。しかし、しばらくすると、会話のターンを取る学生が固定化してきてしまい、参加学生の数も減ってきました。そこで、「日本語コーナー」の話題を決めて数日前から各教室に掲示し、当日は1人ずつ用意してきた話をして質疑応答をする、という形に変えました。このやり方で、自由会話への発展の可能性も残しつつ、参加者1人1人の発話機会が確保できました。さらに、この試みについて日本語教師勉強会で報告したところ、「日本語コーナー」を実施している学校が他にもあることがわかり、互いの学校の「日本語コーナー」に教師がビジターとして参加するという他校との協力関係も実現しました。

他にも、年に1度、長春市の日本人商工会・教師会・留学生会が合同で行う大きなパーティーがあり、そこでも日本人ネットワークが広がりました。そこで知り合った日本人駐在員の方を大学にお招きして、日本語専攻の学生たちを対象にご講演いただく機会なども設けることができました。

せっかくの中国赴任の機会なので、中国語学習も少しずつしていました。同じ大学で中国文学を学ぶ日本語も英語も話さない中国人学生にお願いして、週1～2回、キャンパス内の私の宿舎で家庭教師をしてもらいました。私は実際にできの悪い学生でしたが、家庭教師の彼女は本当に我慢強く付き合ってくれました。こうして少しずつ身につけた中国語は、毎日のように顔を合わせる食材市場のおばさんとおしゃべりをするのにも、行きつけの喫茶店のおじさんと仲良くなるのにも、大変役に立ちました。私より1年半遅れて赴任してきた同僚の日本人教師も、日本語専攻の学生に同じように家庭教師を頼んで一生懸命中国語を勉強していました。他の学校の日本人の先生方も、このように学生に家庭教師を頼んでいる場合が多かったようですが、留学生別科などを持つ大きい大学では留学生対象の中国語クラスに日本人教師の参加が認められていることもあったようです。

生活費は、すべて現地の給与で賄うことができました。月々の給与は日本円換算で5万円弱ほどでしたが、毎月の支出はその半分以下で済みました。残りのお金は、長期休みに日本へ一時帰国するための費用に充てました。年に1度は大学から日本までの往復航空券の支給もあり、1年に2～3回の帰国ができました。

1-3. 得られたこと・現在に活かされていること

この長春赴任から得られたことの中で、「大人数のクラス運営がある程度できるようになった」ということが大変大きかったと思います。最初は、「会話のクラスなのに教師1対学生25なんて、どうやって『会話』したらいいのだろう」と悩みましたが、「日本語母語話者は私だけでも、日本語話者なら教室内にたくさんいる」と発想を転換してからはクラス運営がスムーズにできるようになりました。日本語話者（日本語母語話者の私+日本語学習者の学生たち）同士でたくさん会話ができるように授業を計画することで、活気あるクラスが実現しました。

この経験は、日本国内で日本語教師をしている現在も大変役に立っています。1対1で教師が張り付いていなくても、学生同士で日本語を運用したり日本語学習を進めたりできる環境を作ることを、現在の職場でも心がけています。

2. 再びの長春赴任 — 2011年3月～7月

2-1. 赴任までの経緯

大学院の休学期間の上限（2年間）ぎりぎりまで長春の大学との契約を延長して2006年夏に帰国し、翌2007年春に修士課程を修了して東京の研究機関の研究補佐員になりました。そして、2009年4月に、現在の日本語学校で念願の日本語教師の職を得ました。

現在の勤務先では、毎年3～7月の約4か月間、中国吉林省長春市の大学内に置かれた日本語教育機関へ日本語教員を派遣していますⁱⁱ。2011年の派遣に職場内で声が掛かり、2度目の長春赴任が決まりました。今回は両親と夫の説得にやや苦慮しましたが、最終的には周囲の理解を得て赴任することができました。

2-2. 現地での仕事と生活

今回の長春での仕事は、前回のものとはだいぶ内容が異なっていました。

学生たちは全員半年後に日本の大学院へ留学することが決まっていました。彼らは、日本の文部科学省と中国の教育部の合弁事業により中国全土から選抜された修士号取得者で、10か月ほど長春で日本語教育を受けた後、2011年10月に大学院研究生として渡日し、翌4月に博士課程への進学を目指すという学生たちでした。

2010年10月から中国人教師による日本語教育がすでに始まっており（予備期）、2011年3～7月にはそこへ日本から派遣される基礎日本語教師団が合流して日本語教育に当たり（前期）、8～9月には東京工業大学の先生を団長とする専門日本語教師団が基礎日本語教師団と入れ替わりに赴任して各学生の専門分野に応じた日本語教育を行いました（後期）。私は、東京外国語大学の先生方、JASSO大阪日本語教育センターの教員とともに、6名編成の基礎日本語教師団の一員として、このプログラムに参加しました。

私たち基礎日本語教師団が主に担当したのは、日本語の授業のうち「練習」と呼ば

ⁱⁱ このプログラムについては、東京外国語大学留学生日本語教育センター（2012）に詳しい報告があります。

れる部分でしたⁱⁱⁱ。まず「導入」と呼ばれる授業で中国人の先生方が新しい語彙や文法の説明をし、その2～3日後に私たちが「練習」の授業でドリルや文作り、会話などの授業活動を行いました。プログラム上、学生たちは短期間で多くの内容を学ばなければならず大変だったと思いますが、日本留学という目的が明確だったこともあり、よく努力していました。

また、7月の前期終了時には、各学生が自分の研究を紹介するプレゼンテーションを行いました。発表の要点をパワーポイントにまとめ、発表原稿を作り、何度も練習を繰り返すという作業には、かなりの労力を要したはずですが、いい発表を作るためにどの学生も本当によく頑張って準備を進めていました。発表会の当日は、素晴らしい発表をいくつも見ることができました。

今回の赴任は6人のチームでの赴任だったという点も、前回の長春赴任とは大きく異なっていました。私たち6人は同じ宿舎に住み、同じマイクロバスに乗って宿舎からやや離れたキャンパスへ通勤し、同じ校舎で授業をしました。赴任前の東京での打合せのときからすでにいい雰囲気ではありましたが、赴任期間中に私たちはますます親密な関係を築いていきました。特に、片道40分ほどの通勤バスの中では、日々の授業のことや素朴な疑問、困り事まで互いによく話しました。また、同じ宿舎に住んでいた日本人の先生方や、赴任先の学校の中国人の先生方も、とても楽しい方々で、いつも私たち6人の長春生活を温かく力強く支えてくださいました。

この赴任中も、毎月の日本語教師勉強会に参加し、4か月という短い赴任期間にも関わらず多くの先生方と交流ができました。5年ぶりに参加した日本語教師勉強会の発展ぶりには、驚かされました。会長さん以下、事務局の方々、参加者の先生方の皆さんがとても熱心に会の運営に当たっていました。一部の先生方は週末に長春市内の図書館で日本の大学院への進学を希望する学生たちを主な対象とする日本語文献の読書会も行っていました。休日にもこれらの活動に打ち込む長春の先生方に、尊敬の念を抱きました。

この他にも、様々な休日の予定がありました。日本語教師勉強会で知り合った先生の中に中国人の大学院生の家庭教師から中国語を習っている先生がいて、その中国語レッスンに私も毎週参加させてもらいました。また、赴任先の学校が企画する日帰り旅行や運動会などの行事もありました。

2-3. 得られたこと・現在に活かされていること

今回の長春赴任で学んだ一番大きなことは、「チームで仕事をする楽しさと大切さ」だと思います。前回の長春赴任では学生たちの集団のパワーに感嘆しましたが、今回はそれだけではなく教師集団のパワーにもすっかり魅了されました。

毎日の授業での成功も失敗も、明日初めてやってみようと思っているちょっとした授業のアイデアも、教師同士で包み隠さず話すことができましたし、聞いてもらえる安心感がいつもありました。現在たくさんの同僚教員と一緒に仕事をしている東京の勤務先でも、このようないい関係がいつも保てるように、帰国後は以前よりもより気

ⁱⁱⁱ より詳しい内容は、藤村（2012）をご参照ください。

を配るようになりました。

5年越しに長春という同じ都市に日本語教師として2度目の赴任をするという偶然を得て、多くの貴重な体験をし、学びを深めることができました。この経験を糧に、今後は東京で、教師も学生も個々の能力を発揮しながら、集団としても大きな力を出せるような学校を作っていきたいと考えています。

《参考文献》

- 東京外国語大学留学生日本語教育センター（2012）『2011年度中国赴日本国留学生予備学校派遣教員報告書 2012年度派遣教員のためのガイドブック』
- 藤村知子（2012）「中国赴日本国留学生予備学校における基礎日本語教育 2011年度派遣報告ーより効果的な教育に向けてー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』no.38, pp.135-153